

令和元年度第1回総合教育会議議事録			
日時	令和元年7月26日 17:30～19:40	場所	真庭市役所 3階 応接室
出席者	市長 : 太田 昇 教育長 : 三ツ宗宏 教育委員 : 中井靖典、井口利美、常本直史、徳山周一 政策アドバイザー : 山本 健慈		
協議事項	<ul style="list-style-type: none"> ・真庭らしい就学前からの一貫した教育 ・真庭市の特性を踏まえた高等教育機関立地可能性調査について 		
経過及び結果	<p>○開会</p> <p>○市長挨拶</p> <p>市長：本日はお忙しい中、政策アドバイザーの山本先生、教育委員のみなさん、ご出席ありがとうございます。総合教育会議をより多く開催し、知恵を出し合いながら、教育の課題、目指す姿を共有しながら、連携して教育行政を推進していかなければならないと思っておりますが、なかなか開催できずに申し訳ありませんでした。</p> <p>総合教育大綱にあるように「個性と能力を十分に伸ばし、互いにライフスタイルを応援しあうまち」ということ、そして、「一人一人の中にある幸せになるための潜在能力を伸ばし、それぞれの人生を応援していく」ということで市長部局、教育委員会一緒になってやってきているものの、真庭市でも全国同じように人口減少が非常に問題となっている。今後の真庭をどうしていくのか、永続的に発展していくためにどうしていくのか。悩みながらやっている。SDGs もその中の一つであり、世界の流れの中、日本全体の流れの中、真庭もその中に加わってやっていくということとしている。最終的には、永続的に地域をやっていくというのは地域価値を上げることが重要と考えている。</p> <p>先日、G20 環境関係閣僚会議が軽井沢で行われ、真庭のゴミで現代アート作家が制作した「真庭のシシ」を展示し、私も行ってきました。「真庭のシシ」は関係者の注目も高かった。久しぶりに軽井沢に行ってみて感じたことは 150 年前は中山道の宿場町のひとつでしかなかったが、今は有形無形の文化が育ち、素晴らしい街になっている。文化が一朝一夕では作れないことはわかっていますが、真庭も 100 年かけてでも全国の中でも光ある地域にしたい。</p> <p>こういう関係者との取り組みの中で、100 年後の真庭を考えながら、人づくりの条件づくりをしていきたい。</p> <p>今日は活発な議論よろしくお願いします。</p> <p>○事務局員紹介 総合政策部長：事務局員紹介</p>		

○自己紹介

教育長：教育課題はたくさんある。総合教育大綱が策定されて3年になるので、改めて見直していきたいと思っている。

中井委員：真庭市月田で内科の医者をやっている。教育委員が一番長くやっている。

井口委員：この春で再任ということで5年目になった。引き続き頑張っていく。主婦であるので、家庭から見た教育行政について考えていきたい。

常本：真庭高校を最後に退職した。今は企業に再就職して、企業の若手社員・中堅社員を見て、学生時代にどのような力があるのかが、少しずつわかってきた。高校時代までに、地域の課題を自らみつけて解決を考えるとというのが、いいかなと思っている。

徳山委員：昨年5月から、新しい教育委員として就任した。以前は小学校に勤めていた。教育委員会として、違う立場で教育を見るかたちになった。教育は難しい課題が山積みだと思っている。それでも一つ一つ課題に対処している。

山本先生：自己紹介ということで、今回の議論の参考になればと思って、資料を用意している。ご覧いただきたい。今は東京で5年暮らしている。霞が関の中枢の方と付き合いはあるが、霞が関と永田町には未来はないというのが結論。これからは、地域から人間の再生を行っていかねければ、どうしようもないというのが実感。顔の見える関係が大切であり、どういう風に幸せになるのかということ、皆様との議論を楽しみにしている。

○協議

市長：山本先生の資料は非常に参考になることが多いと思われるので、本資料をご紹介いただいてから協議を始めたい。

山本先生：つくば市は教育大綱づくりをしていて、総合教育会議の議事録は公開されているので、後日でもいいので参考になると思うので見てほしい。

私自身は生涯学習・社会教育の専門であり、何を学び、どう生きることかということを考えていることのでつくば市には招かれた。生涯学習は、生まれてから亡くなるまで、何を学び、どう幸せになるのかということなので、今日の議題と重なると思う。

佐伯胖さんが言うように、幼児教育は大変な立場に立っていると思う。(2004年 https://kansai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=5504&item_no=1&page_id=13&block_id=21) 人間を育てることになっていない。小学校の準備期間になっていて、遊びの時間が少ない。人間としての学び、それぞれの年代に人間として成長できる場を提供できているのか、ということ強く警告している。親も保育士も、今の社会構造の中で歪んでおり問題を抱え込んでいる。問題を抱えた中で、子供に何かを与えようとする、とんでもないことになる。我々が何に歪んできているのか、自己反省・自己認識が必要である。

子育て中のある研究者から聞いた事例の一つ。東京では、中学校受験をするためには、小学4年生で塾に入らなければならない、塾に入るための試験もある。彼の子どもは、あるスポーツをやっている、そのスポーツに強い地元の公立中学に憧れをもち、そこに入り、そのスポーツをつづけることを望んでいた。彼は、子どもに、中学受験はまずおいて、とりあえず塾の試験を受けてみようかと勧め、子どもも同意して塾の試験を受けさせた。結果は合格、しかし子どもは、受験は同意したが、中学受験をするとは約束していないと主張、結果塾には行かずに公立中学にいったちゃんと勉強して高校も行くということになった。多くの子どもはそうはならない。研究者の彼は、それを東大生に話すと、学生たちは、先生の子どもは、えらい、うらやましいと感想をよせた。「自分たちは、親にも先生にも、成績がいいとほめられ続け、その結果東大に入ったが、先生の子どもさんのように、自分がしたいというものを持っていない。私たちより、えらい」これが東大生の感想である。親から褒められることが目標となっていた。東大に入ったら目標が無くなってしまった。という学生が多いよう。人生の段階で何をしたいのか何を目標としていいのかわからなくなっている。成績が良ければ、親・先生・学校も評価をするという構造の中で起こっている現象であり、それが歪んでいるということ。このために幼児教育から、なにを大事にするかを、考えなおす必要がある。

資料の中にある生涯を見通して母親からの手紙というページをみてほしい。これは和歌山大学院生の母からの手紙である。学長を退任したあと、東京のオフィスに届けられた。その学生はアスペルガー症候群であったが、本人が受け入れられなく、頑張って和歌山大学に入学、入学後も頑張って勉強したが就職の段階でダウンしてしまった。当時のゼミの先生がフォローして大学院にも入ったが引きこもってしまい精神科医や学友が取り巻きながら彼を見守っている状況のなかでの手紙だった。その母親は、私が学長時代の大学のスローガンである「和歌山大学は生涯あなたの人生を応援します」ということが大学全体で息づいていることを、息子への一連のケアで実感したので、その感謝を伝えたいと書いておられた。その彼、最近知ったことだが、その彼が今は引きこもりから脱出し、同じように引きこもっている学生の支援のプロとして活躍して

いるという。それは彼自身が自分の性質や特性を理解・受け入れてそれを活かす仕事に就くということを見出すことができたということ。でもなかなかそれを受け入れるまでに、長い時間がかかっている。少なくない事例では、それがさらに長期にわたって受け入れられず、中高年に至っても引きこもりという事態もめずらしくない。

真庭市は小さい規模の学校なので、競争でなく、一人一人の子供が自分の人生の幸せをしっかりと考えるようなプログラム、一人一人の目線に立ってやっていける地域になると思うので議論の参考にしていただければ。

つくば市の教育長の門脇厚司先生（筑波大学名誉教授、教育社会学者）は、日本全体を覆う学力テスト集中主義の中での学校、教師のゆがみから離脱を図り、学力テスト体制からの離脱によって、一人一人の個性や資質に見合った教育プログラムを作っていくということをやっておられる。真庭での今後に参加になると思う。

市長：ありがとうございます。山本先生の話提供も頭に入れて、議論していきたい。では、教育長から「真庭らしい就学前からの一貫した教育」ということについて、お話ししていただきたい。

教育長：大きな思いは、総合教育大綱ができて3年、この間、対話を重視した教育活動、地域での学びの充実、その中で考えて地域貢献をするということをしてきた。学校を核として、保護者や地域を繋ぐことを取り組んできた。その中で、現実問題として、保幼小中などつなぎの段階で、迷いやつまづきを感じている。そうした現状があるので、もう一度大綱の理念を一貫していける保育・教育を考え直したいという思いを持ち、テーマを提案させていただいた。

教育大綱の再確認をすると、幸せづくりの教育をしていこうという宣言であると改めて感じている。これを就学前小学校中学校と続けていきたい、そのために何をやっていけばいいのかを改めて考える必要がある。

幸せづくりの教育は、もちろん園と学校だけで担うことはできないが、子供らがよりよく成長していくためには、園・学校において理念を共有すること学びと育ちを一貫的に続けていくことが、本当に大事だと考えている。それと同時に、今が幸せ、未来が幸せと記載した。ややもすると、やがて子供たちが社会に出て幸せに生きるためには何が必要かということの議論に終始しがちであるが、それはそれで大切だが、幸せづくりの教育にとっては、今が幸せ、山本先生の話しで言えば何がしたいか、その実現の積み重ねでないといけないと思っている。

それを就学前、小学校、中学校とつなげていくために、雑駁なイメージとしては、公私を貫く真庭の良さを生かした柱は3つあると思っている。一つには「郷育を核としたキャリア教育」。答えのないことを学び対話することになる。二つ目は「個性を尊重し伸ばすインクルーシブ教

育」。三つ目は「セーフティネット」。こうしたことを日常の保育、遊びや生活、教育の中に溶け込ませていくことを大事にしたい。

あえてもう一ついうなら、保育・教育に携わる方が幸せを感じている、そういうことを可能な限り目指していきたい。職への誇りを持って仕事に向かう、喜びを持って子供に接する、そういう状況を目指していきたい。

行政が準備して整えばいいというものではなく、対話と自治を大事にしていくことが必要だと思っている。十分な議論の中での提案ではないが、改めて教育大綱の理念を実現する保育・教育を考えていけたらと思いい、提案した。

市長：教育長から、話のきっかけの提案をしていただいた。これからは、みなさんの思いを自由にお聞かせ願いたい。

徳山委員：特別な支援が必要な子供が増えてきていることなど、子供も非常に多様になっていると感じている。真庭市では支援が行き届いていると思う。そうはいっても、行政というのほどこでもそうだが、市・県・国など相談機関がたくさんある。相談するだけでも相当の労力がある状況となっている。色々な機関に一から説明するのは大変な時間労力がある。中心になる窓口が一つとなって、連携していただければ、助かるのではないかなと思う。真庭市の規模ならできると思う。

少子化という問題だが、園小中高の連携が必要というのは同感です。接続した学びを考えると、総合学習や郷土学習といったスキームで、小中・中高と一貫していくという考えも必要だと思う。その中で小中一貫教育も考えていく必要があると思う。

市長：支援が必要な子供ということが出てきました。事務局から真庭市の現状をお話してください。

子育て支援課：支援が必要な子供というのは、真庭市でも増えているというのが現状。療育が必要な子供には、月2回たんぽぽ園というところで療育訓練を行っている。現在は70名程度の子供が通っている。園と保健師と情報共有して、小学校への接続、その後の支援に繋げているという状況。

学校教育課長：入学前からの状況の引継を行い、把握できるように努めている。就学前から高校まで市内で同じ様式で子供の情報を共有している。

市長：現状を踏まえて、委員さん意見ありますか。

中井委員：資料の中に家庭・家族の文字が出てこない。地域はあるが、

家庭・家族がない。地域とすると家庭が置き去りになってしまうと懸念される。家庭での虐待も問題になっている。家庭教育という形で家族・親をどう支援していく、受け身にならないで力を入れていくのかが重要だと考えている。

市長：家庭という観点からということが出てきました。幼児教育ではその年代での育ち（環境）が必要という話があった。山本先生はどう考えていますか。

山本先生：「資料1-1」大綱のロジックは非常にオーソドックスであるが、必要な論理である。

冒頭、最初は一人一人の人間は幸せに生きる権利を持っている。人間の尊厳の尊重、これが据えられている。人によって、なにを幸せと感じるかはみんな違う。これが多様性というもの。一人ひとり、個性的存在であり、多様性とは障害のあるとか、ないとかの問題ではない。その個性、多様性は、幼児期が一番顕著に表れるもの。絵本、動物、植物、天体など子供が興味を持つことは、皆な違う。その没頭できることを保障する社会が必要。現在の学校教育は個性をそぎ落とす仕組みになっている。日本の社会は多様性を認めてこなかった。したがって、人生の出発点での個性、多様性の承認、保障が、大切。子供に相応しい幸せの道筋を追及してあげるといのが大人や社会の仕事ではないかと思っている。親になるとは、親の希望を押し付けるのが仕事ではなくて、その子が持っている資質特質を受け入れて応援してあげるといのが親になるということ。それには、色々とトラブルが生じてくるが一緒になって解決していくといのが親の役割で、お互いが助け合う中で家族が大切で中井委員がおっしゃっていた家族といのが大切。

日本は多様に生きるというものを価値のあるものとしてやってこなかった。一斉に何かをやるのが幸せということになっているということ克服することが非常に大きなテーマではないか、幸せづくりの教育といのは、言葉はうまい表現だが、実現には覚悟がいる。

市長：市役所の役割は、市民の幸せづくりを応援する条件づくり会社だと言っている。価値観を押し付けるのではなく、一人ひとりの幸せとなる条件をつくっていく。教育もそう思っている。

井口委員：山本先生が言った、子供が時代、時代に学ぶ、体験するといことが、できていないといことで、生まれてすぐに園で過ごしてしまい、その実情の中で生きる上でのスタートラインができていないといような指摘を受け、ハッとした。

社会全体が待機児童をゼロにしよう、親は経済活動をしようとい流れの中で、生まれてすぐに園に入ってしまう子供もいる。子供は意見を言えない。子供が犠牲になってしまっているのではないかと感じてい

る。親が子供を見られないのであれば、社会で面倒を見ましょうという風潮になっていて、親は社会に子育てを丸投げしていないか。個性豊かな子供が、一つのところで決まった日常生活を過ごしてしまうのは、いい面もあると思うが、親がきめ細やかに見てやらないといけないのではないだろうか。

順調にいく子供はいいと思うが、困りごとのある子供や親だった場合には、できるだけ小さい時に病状を、教えられるということではなくて、相談するということが大切ではないか。相談によって、変わるところ、見方が変わるところ、補えるところがあると思う。一貫した教育というよりも、遊びや生活をどう守るか、保証するかが大事ではないか。子供の様々な発達段階の時に相談できる場所、母親だけでなく、保育士さんや学校の先生を含めて気軽に相談できる発達センターがあればいい。そういうことができて、落ち着いて来れば、小学校や中学校での主体的な学びや語り合いはできるし、大学での目標の見失いもなくなると思う。子育ての原点は0歳から3歳までではないか。社会は責任を突き付けられていると感じている。

市長：真庭市では発達支援の窓口はどのような状況か、事務局から説明をお願いします。

子育て支援課：福祉課や子育て世代相談センターがある。部署間の連携を行いながら、個別案件に対応している。

市長：今の現状を踏まえて、意見や指摘を参考にしながら、より充実改善していくことを今後も連携協議していけばいいと思う。

常本委員：津山エリアの企業を地域の人に知ってもらうために、親子向けのイベント「津山オープンファクトリー」を開催している。そこに、真庭市の放課後クラブの方々が来てくれた。ラムネづくりを子供たちに体験してもらった。スタッフはどう手伝うのかなと思ったら、スタッフは手を出さずに見ている。子供が考え、試行錯誤しながらラムネを作る。服を汚しながら作業しても、スタッフは見守っている。そういう中で出来上がったときの子供の顔が素晴らしい。素晴らしい顔になるのはスタッフの大人も同じ。そのようなことができる人が真庭にいるということを知ってほしい。そういう環境づくりが大切。

山田養蜂場で働いている方の子供にも支援のいる子がいる。その子は、ロボット作りで海外まで行っている。やりたい興味を持ったことをとことんやる。家庭が理解して見守ると、特徴ある子はどんどんやる。以前、高校にいた時に、支援の必要な子が入学してきた。どういう子かというのか情報共有して、3年間頑張って卒業して、真庭市の企業に勤めて、今も頑張っている。

家庭と行政が一緒になって、就学前から高校まで一貫して見守ってい

くことは、重要と実感している。

今までは、教員や親はやるべきことを子供にずーっと与えてきた。そうすると、高校や大学になると、自分は何がやりたいのかわからなくなってしまう。小さい子供が興味を持ったことをどんどんやらせるということが、大人には求められる。なぜそうなるかということに興味を持っていかなければ、これから IT の世界になったときに、なぜそうなるのかと知らなくてもコンピューターが答えを出してくれる。AI が結論を出してきたことに対して疑問を持たないと、振り回されてしまう時代になっている。子供が「なぜ？」と思ったことに対して、支えていくことが大切だと思っている。

市長：ここで、こういうことをやるといった結論を出す場ではないが、みなさんの意見をお聞きしてまとめてみる。それぞれの生まれながらにして個性を持っている。その個性は家庭環境によっても育まれる。その中で多様性をどう持って成長していくのかということが大事である。教育の中でその多様性がそぎ落とされてしまい、やるべきことを与えすぎてしまった中で、自分の目標がなくなってしまう。それぞれの年代、時期に合ったかたちで成長させ、多様性を持ち続けていくにはどうするのか、これは具体的にどうするのが課題としてあるというのがひとつのまとめ。

もう一つには、支援の必要となる子供に、それぞれの段階でどう連携し合っていくのが、全体の体制としてどうしていくのかというのが課題である。

小中高一貫して考えるというのは、今後またやりたい。

『高等教育機関立地可能性調査について』

総合政策部長：今年度、「真庭市の高等教育機関立地に関するポテンシャル調査」を実施する。高等教育機関については、立地が実現すれば、真庭の文化・教育の充実に寄与し、地域価値の向上や人口減少対策に資する効果が期待される。

ただ、今回は、具体的に「どのような種類のものを」といった想定を持った調査ではなく、教育機関の立地可能性はどうなのか、そのとき真庭にもたらされる効果はどんなものかなどについて、真庭市の持つ地域資源や教育機関側のニーズなどの条件整理をしていきたいと考えている。

「高等教育機関等、学習・教育環境の充実」についての市の政策の中での位置づけを、簡単に説明する。まず、真庭市総合計画の中では、「真庭ライフスタイルを実現する可能性の進化」のために、「一人ひとりの可能性を広げる」政策として「教育」の重要性を示しており、①地域の文化や歴史を教材にした学習の推進、②真庭市、日本、世界で「生

きる力」をつける多様な学びの実践、③学ぶ環境の質の向上と多様な学習機会の提供、などを重点施策として掲げている。また、総合教育大綱では、学術関連の施設が少ない現状に対して、地域の自然資源や文化的蓄積を生かした研究や創作活動の機会づくや場づくりが、「真庭市における学術振興の意義」であることを示した上で、市の施策として「研究の場や高等教育機関の立地・誘致の検討など、学校教育や生涯学習の領域も含めて知的活動に触れる機会や自ら学習する環境づくりに努める」としている。最後に、地方創生やまちづくりにおける位置づけでは、中山間地域において、人口減少が進む要因として教育環境も大きな課題だと言われているが、現在、真庭市には、大学や短大などの高等教育機関がない。これまでのアンケート調査などを見ても、高校生の地元進学先がないことは、若者流出の大きな要因となっている。また、近年では、農業、林業や畜産業などにも、新技術が積極的に取り入れられ、より専門的技術が求められている状況。さらには、様々な分野で外国人材が増加し、日本語学校も求められている。地域の伝統文化や地場産業、観光資源など、真庭の特性を踏まえた高等教育機関の立地が実現すれば、まちに賑わいをもたらすことができるものと考えている。

少子化が進んでいる状況は全国的な課題であり、高等教育機関の立地が簡単でないことは十分認識しているが、課題も含めあらゆる可能性を調査しながら、実現に向けて鋭意取り組んでまいりたいと考えている。教育内容に大きく関わることになるので、総合教育会議の議題として挙げた。

市長：事務局が説明したとおりの観点でと思っているが、問題意識を含めて、ご意見があれば頂戴したい。少子化の中で成り立つか、外国人材が増えてきているなどから外国人材にも触れている。

まずは、山本先生から全体的なお話しをお願いしたい。

山本先生：教育の歴史をたどると、初等教育の始まりは、一か所に集めて同じ教育をして、均等の学力を形成し、その能力を大工場にあつめ、機械を使って大量生産するという仕組みを効率よく動かそうという制度として生まれ、広がった。いま AI 時代になると、ホワイトカラーの職がなくなるとか言われている。ビックデータは、新たなものを生み出す可能性もあるが、その情報の使い方によっては、ある一部の人間が、多数の市民を操作することを容易にする。情報に騙されない学力、騙されない高い教養が必要であり、高い知的教養を持った市民が多くいないと大変なことになる。その意味では、多くの市民が高等教育段階の学習機会をもてるよう拡大すべきだと思う。一方、政府、財政当局は、子供が減ってきている中で、大学の定員を減らせ、大学を再編すべきという議論がある。実際、私学の多くは定員割れの状況もある。ヨーロッパでは田舎の小さな都市に大学がある。

日本では、大学づくりは、大学の設置審査が厳しいが、財政負担も大

きい。兵庫県豊岡市では、県の支援で、芸術系専門職大学を作ろうという動きがある。地方の中山間地域では、一定の時期に学者、学生が集まる場を作るなど、大学というものを設置しなくても、大学での学びが拡張されるような仕組みが、まずあっていいのではないか、それが面白いのではないか。

市長：日本の子供はベビーブームの時には、290万人、今は96万人。真庭市の出生率はいいといわれるが、分母が下がれば全体が上がるという状況。人口減少対策は喫緊の課題である。三菱総研の小宮山元東大総長には、バーチャル大学なんていいのではないかと言われた。自由にご発言ください。

常本委員：真庭高校では、地域に出て学ぶ地域学習をしてきた。そうした子が、短大卒業で社会人になっても、大学卒の子に負けていない。信念、考えを持っている。そのようなことから、地域学習は有益だと思っている。その中で悩んでいるのは、地元にとどまるのがいいのか、一度外に出てから帰ってくるのがいいのか。

哲学者と高校生が議論する場を設けてみたい。短期間でも学べる場所、リカレント教育。企業が求めている人材に育てるのか。色々なことに興味を持っていくことが教育。

井口委員　なんで大学がいるのか分からない。イメージもつかないというのが現状。真庭の子供は、出たくて出ていくのでは、また、出ていくべきなのでは。戻ってきたいと思える地域にしていくのが必要。

こういったことよりも、今の子供たちを支援することが必要だと思う。学童もいっぱいいっぱい。楽しい思い出をたくさん作っていく。交流する場があればいいと思う。

中井委員　面白いと思った。能動的ではなく、積極的に学びたい人を集めて、教えてあげたらすばらしいと思う。その中で、真庭のいいところを教えてあげればいい。

市長：東京の中学生2年生を真庭に連れてきたいと、相談を受けている。その中で先生は、真庭市は経済の循環を実地で学べるところが魅力、と言われている。

徳山委員：真庭市の資源を生かすというのであれば、職人の養成学校がいいのでは。空き家はそのままでは使えない。それでリフォームできる職人も高齢化している中で、ニーズはあると思う。また、外国人にとっても職人の養成は需要がある。発達障害の子の受け皿にもなるのでは。

教育長：単純に考えれば、学ぶ場があるのはありがたい。キャリア教育

という点でもあったほうがいい。まちに若い人がいるのは重要。地域と関わってもらえる。従来の価値観では生きていけない時代が来る。学び、学術の風土は必要であり、その中で拠点は重要。

現実的には、財政面、生徒数など越えなければならないハードルは高いのではないか。

市長：江戸時代にも各藩が教育を行い、地域に学問、文化が育ってきていた。このあたりでは、津山や勝山がいい例。明治以降は、東京に集めて、教育も一極集中している。その中で、農山村部の知的レベルが下がってきている。多様な文化、学術をもって交流するのが、地方分権であり、均衡のある発展につながっていく。

南海トラフの大地震や富士山の噴火といった災害が起こるリスクがあるにも関わらず、東京一極集中している。地方分権していかないと大変なことになる。兵庫県や広島県でも県立大学が設立されてきており、小さい自治体では難しいかもしれないけど、市民レベルの議論を行っていくためにもこの調査を実施していきたい。

山本先生：地域の未来をあらゆる世代で議論するためにはいいテーマだと思う。今は、吉見俊哉東大教授が提唱するように、「人生3度大学入学」説が、現実化することができる時代となっている。(https://www.janu.jp/report/files/janu_vol49.pdf)

真庭で大学を作るというキーワードを並べると、学長には藻谷さん、テーマは里山資本主義、それに岡山大学という資源や、木の産業集積を有効的に活用し、施設整備をイメージしていくと新しい大学という位置づけのものが出来上がるかもしれない。そのためには大学を知っている職員が必要であろう。とりあえず大学の先生に月1回真庭市に来てもらうことをしてみてもいいかもしれない。

市長：徳島県神山町にはIT企業が進出している。これは神山町が文化の発信をうまくやったからだと思う。うまくやれば文化と地域活性化は結び付く。文化は、ただお金がかかるものではない。一番の典型は京都である。

先日、CLS といってアメリカで日本語を学んでいる方が外から見ると真庭市は素晴らしいという感想をいただいた。人によって意見も違う。この地域が永続的に becoming していくのか。安全安心が第一だが、そのためには、知的水準を高めていくことが必要と思っている。そういう議論を市民レベルでもしていきたい。

傍聴者の中に市議会議員がおられるので、今日の感想をお願いできれば。

(傍聴者感想)

議員：孫が高校一年、中学一年ですが、卒業したらどうするのかと聞く

と、兄の方は出ていく、弟の方は残っていききたいという。やりたいことをやってほしい。教育というのは、学ぶときに学ぶことだと思う。こういう場で教育を真剣に考えているというのはありがたい。幼児教育では、健康に育ててほしい。学童保育も学校と地域と一体となって進めていただければ。高等教育については、議会としても考えていきたい。

議員：今回のみなさんの議論を聞いていると、一貫教育ということでトータルで考えているので、いいなと思った。そして、具体的にどうやっていくかというのが課題。北房小学校が同一敷地内に園と小学校があるということですが、湯原地区は同一敷地内に等しいところに園・小学校・中学校があるので、一貫したモデル校として連携していくという考えもいいのではないかと思い、具体的に進めてほしい。

園長：初めてこういう場に来た。子供を預かっている中で、0歳からが就学前という認識をみんなでもってほしい。その認識で、子供たちのことをみんなで見守ってほしい。教育大綱にあるように、子供が真ん中ということを忘れずに、真庭が好きと言ってくれる、真庭の家族のもとに戻りたいという子供を育てていきたい。園・小・中と一貫した教育を地域のみなで共有していきたい。

園長：幼児教育に携わっているが、保護者が子育てを一緒に喜べる環境をつくっていききたい。保護者の方は、園に子供を預けるライフスタイルを作っているが、子育ての喜びを感じるというのが少なくなっている。保護者には子育ての喜びを伝えて、私たち保育者が喜びを共有して、子育てをする大仕事を一緒にやるという意識を保護者に持ってほしい。井口委員からセンター的なものがほしいという意見があったが、園がそのセンター的な役割を担っていききたい。

山本先生：私は、「和歌山大学は生涯あなたの人生を応援します」というスローガンで約6年経営をしてきた。このスローガンは、私が設立経営に関与してきたアトム保育園（大阪府熊取町）の、保育園は、子どもだけでなく、その家族の生涯の人生も応援しますという、現実の実践から学んだもの。それを大学に持っていった。旧落合町では、アトム保育園が、無認可共同保育所時代に2度視察に来られている。また当時の所長代理、現理事長は、落合町の保育士や子育て支援関係者の研修に講演に来たことがある。アトム保育園ができてから何十年たっているが、生涯応援しますという言葉通り、今でもトラブルがあると親や子供が園に帰ってくる。こういう意味では保育園は人生の起点でもあるが、人生途上の応援団でもある。そうなれる可能性がある。教育の機関は人生のトラブルがあったときの拠り所になるという意識で組織を作るのが非常に重要。日本でいう教育は中央統制的なもの。改訂された学習指導要領も、膨大である。問題は文科省がやれというのでやるのではなく、目の

前の子どもが何を求めているのか何が必要か何を提供すればいいのかということを考え続けていただきたいという切実な願い。

市長：みなさんよろしいでしょうか。今日は活発なご議論ありがとうございました。では、今日はこれで総合教育会議を終えます。

○閉会